
偽りの告白、悪夢の始まり

弦巻 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽りの告白、悪夢の始まり

【Nコード】

N87690

【作者名】

弦巻 桜

【あらすじ】

校内でも有名な靈感少女に、罰ゲームで告白することになってしまった矢橋。彼女と出会ったその日から、彼は悪夢と金縛りに苦しめられる。これは彼女の仕業なのか？

1

「わたし、ちょっと人には見えないものが見えてしまう性質タチなんです。

だから、興味本位で近づくのはどうかと思いますよ。罰ゲームで告白に来た二年五組の矢橋先輩やはし？」

その下級生は矢橋を見るなりそう言った。彼はまだ一言も口をきいていなかったにもかかわらず、である。

今年の新入生に自称靈感體質の電波少女がいる——というのは、入学式から一月しか経っていないにもかかわらず、既に校内では有名な事実だ。周囲の人間の大半は彼女を遠巻きに観察しようとしていた。

だが、それを面白がり、ちょっかいを掛けようとする阿呆も、この学校には生息していた。

彼女が純和風の整った顔立ちをしており、とかく目立つ存在であったことも、そんな阿呆共の増殖に拍車を掛けたようだ。

そして、その阿呆を友人に持ってしまった、自称・善良かつ平凡な男子生徒こそ、二年五組の矢橋啓嗣やはしけいしであった。

彼は罰ゲームのために、放課後に貴重な時間を割き、中庭で靈感電波少女と相見えることとなった。

つまりそれが今の状況である。

「何で罰ゲームだって知ってる？　それが噂の靈感ってやつかよ」

罰ゲームの内容が決まったのは放課後、矢橋と友人がゲームを始めた時で、その時から彼らが居た教室には誰も入ってきていない。

しかも矢橋の負けが決まったのはほんの十数分前。

彼がこの少女を探し当てるまでの短時間に、罰ゲームのことは知り得なかったはずだ。彼らはそんなことを吹聴しないし、仮に知り得た第三者が居たとしても、わざわざ電波と噂される少女に近づいて親切に教えたりはしないだろう。

矢橋より頭一つ分背の低いこの下級生は、感情を一切映さない真っ黒な双眸で真正面から彼の視線を受け止め、口を開く。

「罰ゲームってところを否定はなさらないんですね。すがすがしい潔さじゃないですか。

変な期待を持たせるよりはとっと認めてしまう方が、双方とも傷は浅くて済みますね。

そもそも罰ゲームで何の関係もない赤の他人に告白なんて、迷惑も甚だしい発想なんですよ」

「なんで俺のことを知ってるんだって訊いてんだろ」

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。わたし、一年三組の上代みしろつきこ月子と申します」

「それは知ってる。そうじゃ無くて——」

「ではお互いさまではないですか」
「は？」

「先輩は今までも罰ゲームで告白をされたことがありますね？
小耳に挟んだ、風の噂です。

先輩がわたしの力のご存知なのも、噂のせいでしょう。ですから本当に、お互い様なんですよ」

ようやく問いの答えが引き出せたのだが、矢橋の気分は滅入るばかりだった。

罰ゲームのことが噂になっているなどと、聞きたくは無かった。

「一応、忠告はしておきますね。矢橋先輩、身の安全に気を付けてください」

こいつはまたいきなり何を言い出すんだ。

何も言えない矢橋に構わず、上代は言葉を継ぐ。全く温度が感じられない声で。

「大事なことなので、もう一度言っておきます。

先輩は今までも罰ゲームで告白をされたことがありますね？」

「……それがどうした」

「ヒントは、『六条御息所』ろくじょうのみやすどしころです」

どうも会話が噛み合わない。

この少女が単なる靈感少女ではなく、電波少女とも称される理由を、矢橋は理解できた気がした。

春の終わり、空には雲ひとつなく、爽やかな一日だ。

だがその時、中庭には湿り気を帯びた生ぬるい風が吹いていた。

2 (前書き)

虫が苦手な人は注意。

2

その夜、矢橋は夢を見た。

——しくしくしく……

誰かがすすり泣く声。誰だ？ 声は聞こえるが、人の姿は見えない。

声の正体を探していると、足下から黒い靄が這い上がってきた。

得体の知れないそれは、矢橋の精神まで黒く蝕んでいくようだった。

痛み、苦しみ、悲しみ、憎しみ、恨み、妬み……ドロドロした負の感情が、彼を呑み込もうとしている。

彼が必死で抗っていると、体内に入り込んだ黒々とした靄は蛆虫うじへと姿を変えた。

手足の先から脳の隅々まで、体の中を、大量の蛆虫に這い回られている気がして、吐き気を覚えた。

夢のはずなのに妙にリアルで、意識が遠のきそうになる。

そして、その隙を狙っている誰かが、矢橋の中で妖しく揺らめく。何者かに浸食され、自分が自分で無くなっていく恐怖。

耐えきれず、絶叫した瞬間——目が覚めた。気持ち悪い蛆虫の感触も消えていた。

しかし、安堵したのも束の間。

不意に耳元に嫌な気配を感じ、矢橋はベッドから飛び出し、逃げ

ようとした。

が、体が動かない。巨大な鉛にでも押し潰されているかのように、胸や腹が圧迫されて、息も苦しい。

それは体全体にのしかかっているようで、指一本すら動かすことが出来なかった。

これが夢の続きなら、さっさと醒めてくれ。そう思い目を見開くが、視界に広がるのはただ暗闇のみ。

ああ、俺は金縛りで圧死するのかと、矢橋が諦めかけた——その時。

ふっと、体の上から重さが消えた。

自由になった体をゆっくりと起こす。

窓の外に誰かが居る気がして、矢橋は部屋の窓を開けた。

マンションの下、薄明かりの中に見える、小さな人影。

「……上代……？」

悪夢と金縛りは、その夜から連日矢橋を苦しめた。それから解放されて窓の外を見ると、そこには必ず上代の姿があった。

矢橋の脳裏に、彼女の言葉が甦る。

『先輩は今までも罰ゲームで告白をされたことがありますね？』

そして、『六条御息所』という謎のヒント。

——これは、お前の仕業なのか？ 上代。それとも……。

「『六条御息所』って何だっけ？」

矢橋は教室で、後ろの席にいる友人に訊ねた。

「源氏物語だろ？ 光源氏の愛人の一人で、生霊となって正妻をとり殺し、死後も死霊となって紫の上を苦しめたっていう」

「……へえ」

思わず昔流行った、無駄知識評価ボタンみたいな声が出ていた。

「それがどうかしたのか？」

それを訊きたいのはこっちである。

「いや、何でも無い」

——自称靈感少女の口から、生霊や死霊になった女の名前が出たということはつまり、俺は霊に憑かれているということなのだろうか？

それともこの場合、俺の立場は光源氏なのか？ そんな考えも一瞬頭を過ったが、すぐに打ち消した。一介の平凡な高校生に、愛人だの正妻だのが居るわけがない。

——もし、何かに憑かれているのだとすれば、俺は殺されるのか？ 連夜の悪夢と金縛りの感覚を思い出し、ゾクッとした。

友人は、もう一つ情報をもたらしてくれた。

「そういや、花岡がもうすぐ退院するらしいぞ」

——花岡？ ……ってもしや。

「ああ、前に矢橋が罰ゲームで告白した子か。確か二カ月ほど前に、階段から落ちて大怪我したんだっけ」

罰ゲームを提案した阿呆が、いつの間にか話に加わってきていた。「ずいぶん長いこと具合が良くなかったらしいのに、数日前から急激に回復したって話だよ」

詳しく話を聞いていると、どうやら彼女の回復は、ちょうど矢橋の悪夢と金縛りが始まった頃からのようだ。……これの意味するところは？

——花岡に憑いていた悪霊が、俺に標的を変えた……ってことか？

それは裏を返せばつまり、矢橋が悪夢と金縛りの日々 zu 遭うまで、花岡が酷いことに遭っていたということだ。全てを知っているらしい上代の口ぶりからすれば、それは矢橋のせいだ。

『先輩は今までも罰ゲームで告白を——』

矢橋が今までに嘘の告白をした相手は、上代を含めて三人。

一人目は秋峯、二人目が花岡で、三人目が上代だった。

——とにかく、秋峯の無事を確認しよう。

隣のクラスへ行き、ぴんぴんしている秋峯の姿を見て、矢橋はホツとした。

ショートカットの似合う彼女は、快活な笑みで矢橋を迎えてくれた。

秋峯のキャラクターは花岡とは真逆だ。

花岡はどちらかといえば大人しくて、クラスの中でもさほど目立たないような地味な子だったのに対し、秋峯はいつも明るくて、輪の中心に居るタイプ。

矢橋は、秋峯が元氣のないところなど見たことが無かった。

それでも念のために、元氣か？ おかしなことが起きたりしてないか？ と、しつこいくらいに訊く矢橋に、秋峯はきょとんとしていた。

「いや、何も無いなら良いんだ」

曖昧に笑って誤魔化す彼に、彼女は、

「ふーん、変な矢橋」

と言って、また笑った。

3

秋峯に何事も無かったのは喜ぶべきことだろうが、何がどうなつて今の事態に陥っているのか、矢橋にはさっぱり分からなかった。連日の睡眠不足で憔悴気味の矢橋は、自力で考えることを放棄して、手っ取り早く解答を得ることにした。すなわち、上代に直接聞くことである。

昼休み、矢橋は上代を呼び出し、中庭へと連れ出した。
何の前振りもしない。単刀直入に訊く。

「教えてくれ、俺は悪霊に取り憑かれてるのか？」

「確かに先輩は憑かれてはいます。でもそれは基本的に夜間だけですし、憑いているのは悪霊ではありませんよ」

——悪夢を見せて金縛りをする奴が、悪霊で無くて何なのだ？

「生霊です。あなたもよく知る人物の」

「お前じゃないのか？」

訝しげな矢橋を、上代は無表情でスルーした。

「彼女は、最初の被害者です」

——『被害者』？

「花岡か」

と、言ってから気付いた。それではおかしい。

「花岡さんは二番目の被害者でしょう」

——花岡が二番目？　ということはつまり、生霊になった『最初の被害者』は……

「秋峯さんです」

——嘘だろうか？

「あいつ、何にも気にしてないような顔してたぞ？　あの時だったぞ——」

「分かりやすく表面に出る感情だけが本心だとしても？　彼女の場合、抑圧されている大きくて重すぎる感情やストレスを、つい生霊という形で発散してしまったんでしょうね」

「つい」でそんなことはしないで欲しい。

普段の朗らかでサバサバした秋峯の姿と、生霊の暗くてドロドロした感情のギャップに、矢橋は戦慄した。

「本人には生霊になっているなんて自覚はありません。寝ている間に見た夢と同じで、朝になったら忘れていきます」

「……何か……。そうだ！　お祓いとかお清めとか、そういうのは出来ないのか!？」

上代は、ポーズだけは残念そうに首を振る。

「残念ながら。わたしはその手のことは専門外なので」

「くそ、どうすれば……」

「先輩には、出来ることがありますよ」

「！何をすればいい」

藁にも縋る思いで上代を見た。

だが彼女は、藁ごと矢橋を濁流に蹴飛ばした。

「土下座です」

「……………え？」

「誠心誠意、心を込めた謝罪をしてください。先輩は加害者なんですから」

加害者。その言葉がずしりと来た。脳裏を一瞬、囚人服を着た自分が過る。

「本当は先輩が秋峯さんのことを、本気で好きになってしまえばいいんですけど。」

彼女の素直な望みはそれですから」

自業自得だったとはいえ、この数日間、本当に苦しい思いをした。あの黒い靄の正体を知って、それでも彼女を受け入れ恋愛感情を抱けるほど、矢橋は心が広い人間でもないし、怖いもの知らずでも無かった。

恋愛感情がどんなものか、矢橋は知らない。

一応中学時代に「彼女」はいたが、告白されたから付き合っただけで、矢橋としては友人の延長という感じだった。恋人という時間より、友人と大騒ぎする時間の方が楽しかったのだ。

だから、嘘でも好きな人が他の人に告白するのを見ていられないとか、告白された女の子に嫉妬するとか、そういう繊細微妙かつ鮮

烈な感覚が、矢橋には理解できない。

ましてや、強過ぎるあまりに恨みや憎しみに反転してしまう愛情や愛情が、今の彼の手に負えるはずは無いのだった。中途半端に関われば、きつとますます彼女を傷つけるのだろう。

「俺、謝ってくる……！」

そして、誓おう。もう二度と、嘘の告白なんてしない。本気で好きになった奴にしか、好きだなんて言わない、と。

彼女には、憎しみや悲しみとは関係の無い、幸せな恋をしてほしいと思う。

矢橋にはもう、そんなことを言える資格は無いかもしれないが。

秋峯と、花岡にも土下座して謝り、相手の気が済むまで拳で殴られて、ようやく矢橋は辛い夜から解放された。

ぐっすり眠り、すっきりした頭で思考した彼は、あることに気付いた。

3 (後書き)

ミステリっぽくしてみたのに……犯人バレバレでしたよね（笑）

数日後、矢橋は再び上代を呼び出していた。

「俺が悪夢と金縛りに遭いだしてから、花岡が元気になった。あれにはお前が一枚噛んでるだろう？」

花岡の回復と、矢橋の悪夢・金縛り。その分岐点に、矢橋は上代と初めて口をきいていたのだから。

「そうですね。『花岡さんも秋峯さんと同じ被害者ですから、祟るのは止めてあげて下さい』と彼女を説得したのはわたしです。ついでに、『恨むなら矢橋先輩の方でしょう』と助言してあげました」

頭痛がした。――何が助言だ。

「お前な……。もっと違う説得の方法があるだろう？ 『あんな男のことは忘れて、とっと次の恋を見つけましょう』とかさあ！」
「なるほど、そう言うことも出来ましたね。でも、わたしにはとても先輩の悪口なんて言えませんよ」

――『加害者』だと、バツサリ断罪しておいて。どの口がそれを言うか。

「全部、分かっててやったよな？」
「だって、理不尽じゃありません？ 一番罪が重いはずの人間だけが何にも知らずにヘラヘラして、あまつさえ被害者をさらに増やそうとしていたんですよ？」

それを言われるともう、矢橋には何も言えなかった。

「一応、わたしも『被害者』の一人だったんですよ、先輩」

そこでようやく気付いた。

『恨むのは矢橋先輩の方でしょう』

あれは、自分が恨まれることの回避と、念晴らしを兼ねた発言だったのだ。

——あゝ、実は上代もちょっと傷ついてたんだな。

「悪かったな、上代」

「わたしも二・三発殴った方が良いですかね？」

「……それは勘弁して下さい」

上代に対してだけは未遂とはいえ、低頭平身せずにはいられない矢橋だった。

「とにかくもう、俺はあんな罰ゲームには賛成しない。

友人共にも宣言してきたぞ。真実の愛を探すと決めた、ってな」

「それならピンクのワゴン車に乗って、世界一周でもしてくれればいいと思いますよ」

「何でお前まであいつらと同じこと言うんだよ……」

矢橋は、昨日の放課後のことを思い出す。

彼が罰ゲーム反対宣言をすると、阿呆の友人共は、

「オレらはお前があんまりにも鈍いから、お前に気がありそうな女の子を紹介してやってただけじゃん」

などと、のたまった。

——そんなら尚のこと、嘘でも俺に好きだとか言わせたら駄目だろ。

全くどいつもこいつも、もっと他にやり方があるだろうに。そう思う矢橋は、罰ゲームに反対しなかった自分のことは棚に上げていた。

「けど、オレたちもさすがに悪ふざけが過ぎた。反省してる。っつか、ぶっちゃけ懲り懲りだしな、もう」

友人共の顔には、疲れの色が滲んでいた。

——まさか、こいつらにも何かしたのか？ 上代……。

その疑問は、結局怖くて口には出せなかった。その代わり、浮かんだのは別の疑問。

「そういや、なんでヒントが『六条御息所』だったんだ？」

「彼女が——生霊さんの方ですが——ご自分で仰ってたんですよ」

「だいたい、なんで俺が光源氏だったんだろうな？」

「そういう風に見えていたということでしょう。今回の『被害者』達にとっては」

一体自分はどんなふうに見えているのか。矢橋は首を傾げずにはいられなかった。

「ああ、そうだ上代。——ありがとう、な。一応言っとく」

その言葉の真意を問うように、上代が矢橋を見上げた。

「毎晩お前がウチの前まで来ていなければ、俺はとっくに呪い殺されていた……だろう？」

矢橋が夜毎、目にしていた上代の姿は、静謐だった。

本当のことを言えば彼は、最初から上代のことだけは、生霊の正体ではないと信じていた。

彼女を疑おうとする自分がいたことも確かだ。しかし、心の底から疑っている相手だったなら、助けを請うなど決して考えられなかった。あんな得体の知れないものに正面切って挑めるほど、矢橋は勇敢な男ではないからだ——甚だ情けない話ではあるが。

彼は信じられる何かを、彼女に感じ取っていたのだ。理屈ではなく、直感的に。

「わたし、楽しみにしていますよ。先輩がどんな『真実の愛』を見つけられるのか」

去り際、上代は矢橋にそう言った。——ほのかな月明かりのような笑みを浮かべて。

これまで人形のように無表情だった彼女の、初めて見せた人間らしい表情。

それは、初夏の風の匂いと共に鮮やかに焼き付いて、いつまでも矢橋の胸から離れなかった。

4（後書き）

源氏物語については、実は私もさほど詳しいわけではないのですが、六条御息所に共感する女性が多いらしいですね。

自分で読み返していて、「月子、ちょっとやりすぎ」と思う時と「花岡・秋峯が苦しんだ時間を思えばこれでは手ぬるい。矢橋は結局何も分かってないんじゃない？」と思う時があります。ここまで読んで下さった方がどう思われたか、気になります。

こんなところまで目を通していただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769o/>

偽りの告白、悪夢の始まり

2010年11月15日15時38分発行